孤と妻と

大原富枝

狐と棲む

©一九七一　検印廃止

定価六八〇円

昭和四十六年七月三十日初版印刷
昭和四十六年八月十日初版発行

著者　大原富枝

発行者　山越豊

印刷　三陽社

発行所　中央公論社
東京都中央区京橋二―一
電話（五六一）五九二一
振替東京三四

目

次

おあんさま　5
菊女覚え書　41
別れのとき　79
白い小さい踵　115
鬼のくに　141

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

壁紙を貼る女　181
狐と棲む　219
目黒清水町以来のこと　241

装幀　朝倉　摂

おあんさま

中央公論　昭和四十年二月号

おあんさまは雑木林を背負った山田喜助の家の、縁側の日だまりにじいっと坐っていた。

小さくくぐまって、ぽろッ屑かなにかのようにちんまり坐っている。はじめはしゃんと顔をあげているが、だんだん背がくぐまってきて、頭が垂れてゆく。しわばんだ顔のなかでそこだけはいまもつやつやとしていて、昔ながらにくくったように可愛らしい顎が、うすい膝にくっつきそうになっている。

帯背のあたりがだるくなってくると、ときどき鵜のように首を伸ばしてゆっくり背を立ててみるが、いつのまにかまた自分の体が、じりじりとゆっくり、自分の中に埋没してゆくようであった。じっさいには体が二つに、いや三つに畳まれていってしまうのであるが、感じとしては自分が自分の中に果てしなく埋まってゆくのであった。少しずつ、少しずつ埋まっていって顎が膝にくっつきそうなところでやっと安定する。

凍芋のようにしわばみ縮んだ両手を、ちんまり膝の上に行儀よく並べて、そういう姿勢でときどきはうとうとと眠ったりもしているらしい。

眠りぎわも覚めぎわも自分によくわからない。日溜りは日射しといっしょに少しずつ移ってゆく。彼女が日陰になったのにも気づかず坐っていると、庭でもみの莚を返したり、芋茎の皮を剝いだりしている喜助の女房が、黙って干しものを動かすようにうすい敷物ごと、日向の方へ彼女を押しやる。ほかの家族の誰かが、通りすがりに声もかけずにちょいと動かしておいて、さっさと忙しげにいってしまうこともある。

もう何日も何十日もこうして坐っていたと思い、ああ、こうしちゃアいられない、と思う。なにやらせんならんことがあったと、よっこらしょと立ち上り、壁づたいに納戸へはいる。押入からつづらを引きだしてきて、なにやら小裂を探しているのだが、なかなか見つからない。せっせと探していると突然牛がもうーと長く啼き、眼が覚める。

おや、夢を見ていたのか、と思う。そしてその数分あとにはもう夢を見たことも、夢の中のことも忘れてしまうのであった。

「来年はわしももう八十八でおじゃるによって……」

人に声をかけられるといつもそう答えていたが、その来年がいつなのか、フッとわからなくなって、ひょっとしたらもうその来年になっているのではあるまいか、と思ったりする。いまが春なのか秋なのか、フッとわからなくなる。

「おもやんや、……わしは後架へゆきもしたかや」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

いつか全然覚えもないのに、ころッと小さい塊りが裾からころげ落ちたことがあって、彼女はそれ以来、ひょいと思いだすとそういって訊くのである。

「ああ、さっきに。またゆかれもすかよ、おあんさま——」

おもよが庭から答える。

おあんさまは、それならいいと思い、縮んだ手を亀の子のようにせいいっぱいに伸ばしてみて、やっと頭に手を届かせることができた。ぼわぼわと日陰のつぼ草のような髪が伸びている。ああむさくるしや、庵にいたときは勿論のこと、ここに引きとられてからも、自分で頭を剃ることができるあいだは、いつもつるつると美しい手触りに剃りあげていたものだ。ああ、なんぼかむさくるしかろ……と思う。

「剃ってたもらぬか——」

という言葉を彼女は遠慮して、かぼそく伸びた白髪を撫でる。

撫でるときの首の傾げ方と眼づかいに、若かった日の婀娜めいたものが微かに流れた。

「——お昼の飯はくったんじゃな」

髪を撫でた手を膝にもどして、その左手の中指に結んだ赤い短い木綿糸をまさぐりながら自分にいってきかせる。

朝飯を食べ終ると、おもよは赤い木綿糸を彼女の左手の親指に結ぶ。彼女がたのんでそうして貰

うのである。晩飯をたべると小指に結ぶ。こうしておかないと、
「はて、わしは飯をくったであろうか――」
と絶えず迷うからである。
おあんさま、おあんさま、と呼びならわされて、もう誰も彼女の名前さえ知らない。自分の名を彼女はもう長いあいだ耳にしたことがない。自分でそっと呼んでみても、それはどこかよその人の名のように遠い。しかしそれはたしかに彼女の名であった。たよというこの名は。
昨日のこと、一昨日のこと、今朝のこと、いや二十分前、十分前、数分前のことはもう混沌として靄がたちこめたように分明ではなくなっている。
しかし、昔のこと、子供の日のことは、現在のこととは比べものにならないほど、はっきりしていた。

湖の水がさざ波立っていて、板を並べただけの橋が岸から舟つき場まで突きでていた。板橋はたよが裸足で走ると撓ってピッタピッタと唄った。子供たちは毎日その板橋の上を一列になって走った。着物の裾が風にまくれる。先をゆく弟の小さい頭の前髪がいっせいに後になびくのを見ながら、たよは走った。
朽ちかけた棧橋の柱に小舟が何艘かつないであった。遠浅のその岸に、小さい巻貝がたくさん這

っている。子供たちはそれを争って目笊にいっぱい拾って帰るのである。巻貝は母が塩ゆでにしてくれるのを、姉弟で数をかぞえて分けて食べた。

遠浅の浜には子供たちがいっぱい集ってくる。いつのまにか縄張りができていて、強いものが弱いものの縄張りを奪った。姉弟の場所は兄が確保してくれたところだったが、ゆくのは姉弟だけなので、しばしば年上の男の子たちに荒された。

「わァい、泣きべそ、出べそ、猪の子のだんご――」

はやしたてて投げてよこす貝は死貝ばかりであった。ばらばらと頭にあたると意外に痛かった。弟の歳二郎の泣きだすのをなだめて、足場の悪い崖ッぷちの岩場へいった。急傾斜で深みへ落ちている岩に巻貝がしがみついている。岩には水苔がくっついていてぬるぬるしていた。歳二郎が細い尻ッぺたを三角に帆立て、うつむいてせっせと笊で貝をすくっている。小指の先がちょいとさわっても、赤とんぼ一匹その尻の帆先に止っても、深みへ頭からつんのめってゆきそうな姿勢である。そちらをはらはら気にしながら、たよは自分も彼と全く同じ姿勢で、真白になるほど力を入れている足の親指一つに重心をとりながら、貝をすくった。

貝をすくってゆかなければ腹が空いて仕方がなかった。たよの家だけでなく、どこの家でも昼飯をくうなどということは夢にもないこと、朝夕雑炊をどうやら腹にもつだけ食う。春の草の萌えるときに限らず、子供たちは草を摘みにいった。よめ菜、やぶかんぞう、のかんぞう、つくし、はこ

べ、それらを味噌汁や雑炊の中に入れて食う。あくの強い野草にあてられて吐いたりした。
軍の噂がたえず流れていた。一年のうち、軍のない日はなかった。落武者が群れて、または二人三人で落ちてゆくのを、子供たちはものかげにかくれて息を殺して見守った。畑も田も荒れ果てて、作物は殆どとれないのであった。
昨日いっしょに遊んだ小さい男の子が、落武者にたった一討ちに殺された。子供は皮つきの塩ゆでした田芋を一つ家で貰って、うれしくてうれしくてすぐ食べてしまうには惜しく、大切に抱いて眺めてはにこにこし、眺めてはにこにこしいしい野道を歩いていた。
榧の木のかげで一人ゆっくり食べるつもりであった。小さい彼は兄や姉のように早く食べられない。せっかくの芋を兄たちに奪られることを恐れて、彼は一人外にでてきたのである。
榧の根方に両足を投げだして坐り、彼はうっとりと田芋を眺めていた。後に人の気配がして、榧の幹に並んで黒い影が映った。彼は田芋をしっかり抱きしめた。
「――よこせッ」
兄ではない大人の低い、怖い声がした。
両手をしっかり胸に抱いている小さい亡骸は夕方、榧の木の根方に発見された。
そのころたよは兄をこよなく頼みに思っていた。父は、これは別格にえらい人であった。兄は父に似て上背のある立派な若衆で、たよは彼を兄に持つことを誇らしく思っていた。兄はときおり、

山へ鉄砲うちにゆく。その朝は母は暗いうちに起きだして兄のために昼めしの弁当をつくってやる。挽きわり麦に僅かばかりの米を入れ、大根葉の塩もみをまぜ合せた菜飯であった。たよと弟もその朝は菜飯をわけて貰って食べることができる。それがなんともうれしくてならない。

「兄さま、鉄砲うちにゆきなされや、のう」

とたよはねだった。

しかし鉄砲うちはいつでも任意にできるものではなかったらしい。兄は家中の青年たちと連れだってでかけてゆく。獲物は分配すると兄の取前はほんの僅かのときもある。獲物よりも、菜飯を炊くことがうれしかった。あのようなうまいものが、またとあろうか、と思う。

「菜飯というものは、まことにまことにうまいものよ——」

日向の縁側にぼろッ屑のように坐りながら、彼女はいまも口のなかに、あの菜飯の舌に馴れ寄る鄙びたやわらかい塩味のほのかな味いを想っている。

庵室のなかには阿弥陀如来の木像が祭ってあって、その前に油皿に浸した燈芯が供えてあった。菜種油のしんねりと冷たく甘いような臭いが、庵室のなかに漂っていた。

「お庵さま、おあんさま——」

外に小さい草履の足音が重なって、足を開いて踏んばって小さい体の力いっぱいに、重い腰高障

子に取り組む姿勢の、頭と肩が日射しに影法師になって映り、ようやく引きあけられた障子からバタバタ子供たちが、埃くさい、日向臭い体臭を撒きちらしながら、彼女の周りに集ってくる。

夫の雨森儀右衛門に死に別れてから、髪を下して庵室にはいったとき、たよは六十歳を少し越していた。真実心はあるが、父や兄に比べれば平凡な男にすぎないと生前はどこか喰い足りない思いを抱きつづけていた夫を、死なれてしまってからたよは真実愛しいと思うようになった。

髪を下ろしてからの彼女は、しゃばの人間たちに逢うのがうっとうしく感じられるようになっている。先方にもやはり一重の垣根をおく気配が見える。毎日のように彼女の庵室を訪ねてくれるのは小さい、稚い客ばかりであった。

「――のう、むかし物語なされませ、おあんさま、軍ものがたりなされませ」

子供たちはそういってせがんだ。

「……さてもさても、わしが親父どのは山田去暦というて、石田治部少輔どのに奉公し、近江の彦根におられたが、治部どの御謀反のとき、美濃の国、大垣の城へこもって、われらみなみないっしょにお城にいておじゃった。――そのとき、不思議なことがおじゃった――」

子供たちの小さい顔が緊張して重なり合い、怖そうに彼女を見守りながら互にからだをすり寄せてくる。彼等はもう繰返しこの話をきいているので、すっかり諳んじているくらいである。しかし決して彼等はそういうふうには振舞わない。繰返し彼女にせがむ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.